

## 12. 伝統的結婚とその変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上中, 亜紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4971">http://hdl.handle.net/2297/4971</a>

## 12. 伝統的結婚とその変化

上 中 亜 紀

- I. はじめに
- II. 結婚の背景とその変化
- III. 伝統的な結婚のプロセス
- IV. 結婚後の嫁の生活、立場
- V. おわりに

### I. はじめに

女性にとって「結婚式は人生最大のイベント」と言われるほどに重要な位置づけをされているが、その形式は変化の過程にある。鳥越村、特に別宮地区で結婚式はどのように行われてきたのだろうか。別宮地区では第2次大戦後もある時期まで結婚式は自宅で行われていたようだが、私はそのような自宅結婚式を実際に見たことがないので、今回聞かせていただいた話はすべて想像することしかできない。しかし、そのことがさらに私の興味を引き立てていった。今回の調査では、別宮地区の中でも別宮、杉森、神子清水、渡津、三ツ瀬、相滝、阿手でインタビューを行った。私はそれらの話を元に、主に、農業者が中心であった神子清水と賃金労働者が中心であった阿手を例に取り上げ、1950年代までの自宅結婚式がどのように行われていたのかを再構成し、またこの2つの集落で結婚形式にどのような違いが見られるか、その後の変化がどのようなものであったかを考えてみた。

### II. 結婚の背景とその変化

#### 1. 結婚平均年齢

1950年代の結婚平均年齢に各集落で差はほとんどみられない。別宮、杉森、神子清水、渡津、三ツ瀬、阿手と河野地区の三坂集落で私自身が直接伺って調べたデータをまとめてみると、いずれの集落でも当時の結婚の一般的な年齢は男性で22～25歳まで、女性で20～23歳までであった。男性で30歳を超えて独身は珍しく、女性も17、18歳で嫁に行く人も多く、25歳を超えると婚期を逃したことになっていたようだ。

1960年代以降、結婚平均年齢はだんだんと高くなってきた。現在では養子に来る人もいないために婚期が遅れているという現状である。しかしながら、「遅くとも30歳までには結婚すべき」という昔ながらの考え方は現在の高齢者にはまだ残っているようだ。

## 2. 男女の出会い：見合いと恋愛

1950年代の男女の出会いの場とはどこであったのか、結婚相手とはどのように知り合ったのかを見てみよう。神子清水、渡津、三ツ瀬、三坂集落では、結婚相手はほぼ親が決定していたようだ。相手は同じ集落内の人やメイやイトコなど親族が多かった。恋愛結婚はごく少数だったようだ。その原因として男女の出会う機会の少なさも挙げられるだろう。唯一の出会いの場は盆など祭りの行事の際の踊り場であったのだ。祭りは男女のよい出会いの場であり、若い人は男女問わず、祭りでは踊らなければいけない感覚であったようだ。盆踊りは神社の境内で8月15、16、17日と3日3晩行われた。雨の日は小学校の広場で行ったそうだ。盆踊りでは男の人と女の方は逆廻りに廻って踊る。その際に女性は「シバカリ」といって男の人の顔をのぞいてチェックしていたそうだ。1950年代はテレビなどの娯楽がなく、盆踊りや演芸会と呼ばれる田舎芝居が唯一の楽しみであった。また当時は青年団が一番活発な時期であり、祭りは地域のレクリエーションとして、男女の出会いの場となっていたようだ。

これに対して、阿手だけは少し違っていた。阿手には1932年まで阿手鉦山が、また、1962年までは尾小屋鉦山が近くにあった。この鉦山のおかげで1950年代の阿手は人口2000人ほどの大集落であり、集落内にはさまざまな交際の機会があった。そのため、見合いや親が相手を決定することは少なかった。男女が仲良くなり、集落外へ出て行くという駆け落ちさえも当時から行われるほど恋愛結婚が多かったという。また、婿養子が多かったことも阿手の特徴と言える。これは阿手からは尾小屋鉦山が近く、男の方は皆鉦山へと働きに行ってしまうためだ。そのため、同じ集落の人との結婚のほか、小原からの人との結婚も多かったということだ。

1960年代以降、鳥越村全体で本人同士の意思が確認される見合い結婚が増加する。その場合、お見合いをしたいという申し込みはたいてい男の側からであったと言う。まだまだ男尊女卑の考え方が残っており、女性側からはお見合いを申し込みにくかったようだ。お見合いの仲介人は男女の仲介をすることで、何らかのお礼をもらっていたそうだが、仲介を職業としている人はいなかった。仲介人は親戚が行う場合が多かったという。しかし、見合い結婚が増加したといっても、阿手を除く地域での恋愛結婚はまだまだ少ないものであり、やはり親の紹介が主流の時代である。

1980年代に入るところには見合いは一般化し、仲介専門のセミプロと呼ばれる人まで登場する。セミプロとは仲介を行うことで報酬を得ていた人のことである。親類の中で嫁、婿の

心当たりがない場合などはセミプロに頼ることが多かったようだ。神子清水で実際にこのセミプロにお世話になったという人の話を聞くことができた。1980年頃までは鳥越村一円に心当たりのあるセミプロが相滝に1人いたようだ。鳥越村外の人との結婚を望む人は、鶴来や小松にいるセミプロに紹介してもらっていたようだ。1990年頃までは鳥越村内にセミプロはいたようだ。この時期から恋愛結婚が主流となってくる。

### 3. 通婚圏と結婚相手

通婚圏とは事実上は「お嫁さんがどこからやってくるかという範囲」のことである。集落ごとで違いはあるのだろうか。私が今回の調査で得たデータをまとめ、分析してみた。

1930年代～1960年頃

別宮	集落内の人、親戚(メイやイトコ)
杉森	集落内の人、近い集落からの人
神子清水	集落内の人、親戚(メイやイトコ)、近い集落からの人(杉森、相滝など)
相滝	比較的集落外の人との結婚は多かった
渡津	集落内の人、親戚(メイやイトコ)
三ツ瀬	集落内の人、近い集落からの人(数瀬、別宮など)
阿手	集落内の人、近い集落からの人(小原、左礫など)、恋愛、見合い、婿養子も多かった

上からわかるように、別宮地区全体で集落内結婚が一般的であった。また、「イトコ添え」と呼ばれる親戚との結婚も多く、相手を決定するのは主に親であった。

1960年代以降、通婚圏は集落内から村内へと広がる。その後、通婚圏は村外へと広がり、現在では村内婚は極少となっている。

### 4. 自宅結婚式はいつまで行われていたか

別宮、神子清水、三ツ瀬、相滝、阿手で得たデータから見てみると、いずれの地域においても1960年代後半までは迎える側での自宅結婚式が行われていたようだ。この場合の自宅結婚式とは、嫁をもらう場合は婿の家、婿養子を迎える場合では嫁の家を指すのである。

### 5. 時代背景と結婚概念の変化

鳥越村全体の人々の結婚に対する考え方の変化を探ってみようと思う。戦時中、戦後、現在と大きく3つに分け、当時の人々は結婚をどのようなものと捉えていたのか説明してみる。

#### ・戦時中(1935～1945年ごろ)

戦時中は物がなく、衣料切符が手に入らないと衣服も買えない時代であった。店に入っても品物がお茶しかなく、買い物しようにも品物がないという状態であった。当時は「女=産むもの」という考え方が強く、実際子供を5人～10人くらい産む人も多かった。結婚に対してもイエとイエの結びつきであるとともに「結婚=男女の結合」という考え方が強かった

ようだ。別宮でインタビューさせていただいた方の1人は「当時は娯楽がなく、“夜這い”は娯楽の一種であり、じょうろ屋(売春屋)は男のはげ口であった。しかし、親の決めた相手と結婚する人が多く、SEXの喜びを知らない人が多かった」と語ってくれた。結婚は次世代に子供を残すためのものであり、本人達が本当に望む結婚は少なかったようだ。当時は結婚相手としてはメイやイトコなどの親戚か財産のつりあう人、同集落内の人が多かった。さらに、里子やもらい子など養子も多かった。お金のある人は子をお金を払って養ってもらい養い子に出していた。反対に、お金のない人は子売ってお金を得ることもあったようだ。当時は生活していくことが精一杯であったのだ。このような時代には結婚式はほとんど行われていなかった。結納もごく簡単であり、嫁はたんすなども持たずに夜中にこっそりと婿の家へと来ていた、ということもしばしばであった。たんすなどを持ってくる人は極稀であった。持ち物というと柳行李(衣装箱)を1つ、2つ持ってくるくらいであった。式を行ったとしても服は一張羅で式後の挨拶などもなく、披露宴も簡単なもの、料理は赤飯を配るくらいであったという。

・戦後(1950～1970年ごろ)

戦後まもなくの1950年代は、やはり結婚相手は親の決めた相手であった。結婚後も仕事や子育て、家事に追われ、祭りや講が人々の楽しみであった時代だ。それでも1960年代以降、結婚式はしだいにしっかり行われるようになると変化してくる。主に婿側の家で式は行われ、料理も料理屋に頼むようになる。式には集落内の多くの人々が参加し、披露宴はにぎやかに行われるようになってくる。農業中心の別宮、杉森などではこういった変化は比較的早かったようだが、鉾山中心の阿手などでは1960年代後半まで料理は各家で用意し、いつの間にか嫁が来ていたなど比較的遅くまで質素な結婚式が行われていた。

・現在(1970年ごろ～現在)

結婚式は主にホテルや式場で行われている。別宮方面では比較的早くからホテルを利用していたようだが、阿手など山村集落では遅くまで各家で式は行われていたようだ。中には「今の若い人達は大きな所で立派な結婚式が出来て羨ましい」という声を聞いた。

### III. 伝統的な結婚のプロセス

この報告における伝統的結婚式とは1960年代以前の自宅結婚式を指している。ここでは、戦前から農業村的集落であった神子清水と、鉾山での賃金労働や林業などの従事者で構成されていた阿手の例を取り上げて1950年頃の結婚のプロセスをみていく。

## 1. 結納

### ① 神子清水の例

戦前は新郎の父と新婦の父、仲人という男だけで結納は行われた。これは男性のみで重要な取り決めがなされるべきだという当時の考え方によるものだ。また、結婚がイエとイエとの結びつきという意味が強かったことにも関係している。戦前の考え方では男性は公的な場に出る存在、女性は家庭にいる(私的な存在)とされていたためだ。また、結婚前に男女が出かけるというようなことがなく、女は公に出るべきではないと言われていたためでもあった。

1950年代の結納に新郎は参加しない。新郎の両親が仲人と共に嫁の家へ出向く。参加者は新郎新婦の両親と仲人のみである。新郎の家は結納品を持参し、嫁の家のご馳走でもてなしを受ける。ご馳走には赤飯が必ず出された。赤飯はお盆や報恩講の時にも出され、縁起が良いとされていた。そのため、赤飯だけは必ず嫁の家で作っていた。基本的に料理も自宅で作っていたそうだが、神子清水ではこのころから赤飯以外の料理を仕出し屋に頼む家もあったようだ。

1960年代以降、結納時の参加者は増えていく。1950年代には両家の父のみであったのが両家の母も参加するようになり、現在では新郎新婦の両親と本人も結納には参加する。これは家の中心であった長(父)の存在意味がしだいに変化してきたためと言えるのではないだろうか。現在は料理も自宅では作らず、ほとんど仕出し屋に頼んでいるようだ。

### ② 阿手の例

1950年頃の阿手の結納参加者は新婦の両親と「ちょうちん持ち<sup>1)</sup>」(仲人)のみであった。仲人が嫁の家へ出向き、嫁の両親が迎える。嫁の家は仲人にお酒、つまみを出す。そして仲人は結納品として預かってきた品物(酒2本くらいと箱に入った結納金など)を嫁の家へ渡して結納は終了する。阿手の結納はごく簡単なものであったようだ。

## 2. 結婚式

### ① 神子清水の例

神子清水のAさんから、長女が同じ神子清水へ嫁いだ時(1950年代)の話を伺うことが出来たので、この話をもとに記述する。

式場は婿の家であった。結婚式当日、午前中に嫁の荷物は嫁ぎ先へと先に運んでおく。現在では業者が運ぶのが当たり前だが、当時は親族で運んでいた。トラックを持っている家も珍しく、青竹を組んで荷物を組んでくくって担ぎ、披露がてら運んだという。

午前10時過ぎになると婿家から3人ほどの迎えがやってくる。嫁はまず、この迎えに来た人によろしくという挨拶をした後に実家の仏壇へお参りしてから仲人、迎え人と共に出発する。途中、「嫁いびり」<sup>2)</sup>が行われる。これは花嫁が婿の家へ向かう途中に縄を張ったり、

はしごを出して置いておいたり、雪道に穴を掘ったり(おちんこ)するもので、主に若者がよくやったという。嫁達一行はこの“通せんぼ”から先へ進むために、あらかじめ用意しておいた酒や饅頭を渡すのである。Aさん自身は養子であり、Aさんは三ツ矢野から神子清水へ婿養子としてやってきたそうだが、婿養子の場合でもやはり「嫁いびり」はあったという。Aさんの場合は集落5つを越えてやって来るまでに、酒5本がなくなったそう。この「嫁いびり」は、人々のいたずらと羨ましいという気持ちが入り混じったもので、レクリエーションの一種でもあったが、嫁を引き止めてじっくり見ようとする意味も持っていた。この「嫁いびり」は嫁にとっては迷惑ではなく、むしろ嬉しいことであり、「嫁いびり」がないと歓迎されていないのでは、という不安さえあったという。

13時頃に婿家に到着する。そして婿家の玄関にて「合わせ水」の儀式が行われる。これは嫁の家の台所から持ってきた水と婿家の台所の水を混ぜ合わせたものを杯に注いで嫁が飲み、その杯を落として割ってから家の中へ入るといったものだ。水は山の湧き水のことを示し、当時は水が合わないから離婚した、水が合わないから病気になったと言われるほど水の相性は大切にされてきた。婿の家に入る前に水を合わせて飲むことで体に水が合ったということになるのだ。そして飲んだ後に杯を落として割ってから家に入ることで、もう実家には帰りません、この家にいる気持ちは変わりませんという意味を表しているのだ。また、盃がうまく割れると結婚生活もうまくいくと言われていた。現在でも鳥越村では、この「合わせ水」の儀式は残っており、ホテルや式場で式を挙げる場合でも結婚式前に家でこの「合わせ水」の儀式を行い、仏壇の前でお参りしてから式場へ向かうという。

「合わせ水」の儀式の後に、婿の家の中へ入り、まず仲人が婿側の両親に挨拶し、嫁の親も挨拶を交わす。それから嫁は一番に仏壇へ行き、お参りする。この時、嫁の両親も後ろに座り、一緒にお参りする。読経はせず、2回手を叩き、挨拶、そしてまた3回手を叩く、というのが一般的なお参り方法であった。

以上で結婚式は終了となる。しかしながら婿が式には参加していないことがわかる。

この後夕方から披露宴が行われる。この披露宴にも婿は初めから参加しない。家の中で主に「酒沸かし」をしているのだという。この披露宴の招待範囲は親戚、集落内の隣人や仕事で付き合いある人などだ。婿側の親しい人が中心だが、嫁側の親戚も出席するそう。披露宴では嫁が正面に1人で座り、他の人は向かい合わせで座っている。一応、婿側、嫁側と別れて座るのだが、神子清水では新婦以外の席順はあまり決まっていなかったそう。まず、仲人が「よろしく」という挨拶を交わし、婿の父、嫁の父が挨拶、続いて嫁が挨拶を行う。これで嫁の役目は終了し、嫁は一度下がり控間に入ると振袖などに着替え、その後は酒を注いだり注がれたりする。この時に婿は初めて登場し、お酌に加わる。この時の料理は1960年頃までは自宅で作っていた。1960年以降は仕出し屋に頼むようになった。この時もやは

り赤飯だけは自宅で作っていたという。

この披露宴時に必ず歌われる歌が「めでた」であった。これは誰が歌ってもよく、「ちょっと歌ってくれや」と頼まれた人が歌っていたそうだ。「めでた」はこれから始めるぞ、という意味が含まれており、披露宴に出席することで歌を覚え、代々歌いつがれてきた。人々は披露宴に出るたびに歌うことで覚えていたのだ。しかし、現在ではあまり歌われておらず忘れられかけている。歌詞や節まわしは集落ごとで少しずつ異なっており、神子清水、相滝、杉森では同じ歌詞であるが別宮へ行くとまた少し違っていたそうだ。披露宴は3時間ほどで、だいたい21時頃には終了する。その後はただの宴会として行われる。

## ② 阿手の例

1950年代の阿手では、あまり結婚式を大きく挙げるということにはなかった。いつの間にか嫁は婿の家に嫁いできており、後にうわさとなって初めて結婚していたのだと知る人もいたほどである。ここでは1950年代に当時鉱山で働いていた同じ阿手内の男性の元へ嫁に来た女性Bさんの例を参考に述べていく。

式場はやはり婿の家であった。嫁は出発前に自宅の神仏にお参りを済ませておく。そして仲人、嫁、両親が婿家へ向かって歩く。しかしながら神子清水とは違い、嫁の出発時間は夕方なのである。地区内同士の結婚の場合は、花嫁は自宅で髪を結って着付けをしてもらってから歩いてくるのだが、遠い所からの人は車などで途中までやって来て集落内に入った所から歩いてきたのだという。嫁入り道具としては、たんす1本ほどで、これも近い集落からの場合は後で運び、それ以外の場合は結婚式日に親戚一同で担いで運んだ。

嫁が婿家へ向かう途中には、神子清水と同じように婿の父親が迎えにやって来る。しかし、それまでには「嫁なぶり」<sup>3)</sup>が同じく行われる。「嫁なぶり」は結婚していない男性(青年団)を中心に神子清水同様、道路に縄張りをしたり、「おちんこ」を作ったり、婿家の玄関の物を隠す、吊るすなどを行うものだ。披露宴時に蛙を投げ入れたこともあるという。しかしながら、嫁に触ることはない。阿手ではこの「嫁なぶり」をほどほどでやめてもらえるようにと、青年団に結婚式前に酒2本を渡していたという。とは言っても、多く意地悪された方が「おいつく」(この家から出ていかずにがんばる)という気持ちになったそうだ。

そうして、ようやく晩に嫁は婿の家に到着する。そして玄関での「合わせ水」の儀式の後に婿の家の神仏にお参りするのだ。阿手には神棚と仏壇が1つずつある家が多かったそうだが、仏式が一般的であり、仏壇におまいりするだけの簡単なものも多かった。婿はこのお参りの際には登場していた。ここで結婚式は終了である。

その後、嫁が到着するとすぐに披露宴は開始される。披露宴には親戚、隣人、嫁が同集落出身なら区長さんも参加していたという。婿側が料理や酒を用意する。料理は買ってきた鯛や刺身、山菜、金花糖<sup>4)</sup>などが出されたそうだ。披露宴は約3時間行われるのだが、やはり

途中に「めでた」は歌われていた。歌うのは婿か嫁に関係ある歌の上手い人であったようだ。披露宴の最後は仲人がしめる。ここまでが披露宴だ。そしてここからは人々の楽しみとして延々と宴会が続いたという。

### 3. 挨拶まわりと「呼び戻し」

ここでは1950年代の結婚後の挨拶まわりと嫁の帰省について神子清水と阿手を比較しながら述べていく。

#### ①神子清水の例

同じ集落内への挨拶まわりは結婚式と同じ日に行われる。時間帯は特に決まっていないが、結婚式後に、嫁は実の父か兄弟と集落内の全家へお嫁にきたという挨拶を行ったという。その際に婿の家が炊いたお赤飯と嫁のお土産である饅頭を配ったという。饅頭は嫁の家が事前に饅頭屋に頼んでおいたものだ。嫁の家は結婚式前にこの饅頭の包装を行っておかなくてはいけないわけでもある。挨拶まわりの時間帯は特には決まっていなかったそうだ。結婚式後の挨拶まわりは神子清水では現在も行われている。これは自宅結婚式でなくても結婚式後に行われているそうだ。

結婚後の最初の年の正月と盆に嫁が実家へ帰る習慣があった。1月6日に婿が嫁の実家へ一緒に行き、嫁が婿を皆に紹介するのである。「婿さより」<sup>5)</sup>という。婿は嫁の家でご馳走を食べ、泊まらずに帰ってしまう。しかしながら、嫁は1月6日から1月14日までの間、実家で過ごすことができた。これを「やぶ入り」や「ちょうわい(ちょうわい)」と呼んでいた。「ちょうわい(ちょうわい)」は「ちょうはい」がなまった呼び方ではないかと言われている。普段嫁は実家へ帰っても1時間ほどしか滞在できないのだが、この時だけは実家で羽を休めることができたというわけである。この嫁のやぶ入りは神子清水では結婚後2、3年行われる。集落ごとに嫁のやぶ入りの形も少しずつ違い、杉森では結婚した1年目だけしか行われなかった。

#### ②阿手の例

まず、結婚後1週間以内に近所へ挨拶まわりを行う。その際に自宅で作っておいた赤飯と饅頭屋で頼んでおいた饅頭(五色饅頭<sup>6)</sup>など)を持参するのが一般的である。

結婚式後の“呼び戻し”は毎年12月31日に嫁の実家が婿を招待していた。これは「婿よび」と呼ばれるもので、神子清水の「婿さより」と変わらない。しかしながら、婿だけでなく、嫁も泊まることなくその日のうちに帰っていたという。この点が神子清水との違いだ。

#### IV. 結婚後の嫁の生活、立場

1950年代、嫁姑関係は今とは比べものにならないほど厳しいものであった。それは生活が大変であったためでもあるだろう。結婚後、嫁は夫の家に合わせなくては行けない。まず、姑は嫁に家事を手伝わせて教えたという。嫁の夜なべは当然で、姑より先に眠ることは許されなかった。杉森の女性Cさんは「麻をつくっていたのでお昼の作業中に背の高い麻の草に隠れて居眠りしていたのよ。」と教えてくれた。1950年代は、たとえ自分の娘でもさほど大切にはしていなかったという。姑の力は圧倒的に強く、嫁姑関係に姑の息子である婿は口を出せなかったらしい。

嫁の一日(乳児のいる場合)の例

朝：食事の準備

田仕事、畑仕事(田植えは隣近所と7、8人で行う)

子供の世話(オシメ替えなど)

昼：姑と再び田仕事(冬は麻作り)

夜：煙草づくり(3~4月)、藁仕事、麻糸作りなど

夫が炭焼きをしている場合などは嫁は夫の手伝いも行った(木を背にかついで運ぶなど)。嫁が子の面倒を見られない場合は祖母が行った。夏は畑仕事、冬は麻糸作りが一般的であった。5月20日頃より男の人が馬で田を翻らし、その後女性が田植えを行った。朝4時から畑仕事をする人もあったそうだ。冬は麻糸を作る。夏のうちに干して乾かしておいた麻を細かく切って、くしで細く裂いていく。そして、それを手でまとめていく。その後、機械で麻作りを行う。これは女性の仕事であった。夜は煙草作りや藁仕事、麻糸作りなどが行われる。藁仕事はワラジ、草履、コモなどが織られた。半日で3足作る人もいたという。また、少し裕福な人は嫁が金沢などに下宿して働く場合もあった。鳥越村公民館の調査によると、1950年代の鳥越村の主婦たちの80%が日稼ぎに出ていた。日数は15~20日が圧倒的に多く、家計の補助としていつでもすぐ現金が手に入る日稼ぎは魅力があった。しかし他に内職があれば辞める人も多く、子供にだけはこんな生活はさせたくないと言っていた。

神子清水など農村的集落と阿手など山村的集落で嫁姑関係に大きな変化は見られない。しかし、阿手などでは婿養子が多かったことから、比較的嫁姑関係の楽な家も多かったようだ。

『石川の女性史 戦後編』によると、当時の鳥越村の女たちの一日は農作業に12時間、家事に4時間あまり、休憩は40~60分であった。それにも関わらず、家族の家事分担はわずか20%である。後の80%は農作業と育児を抱えた主婦がするという具合で、農繁期が終わると肩が凝る、身体がだるい、眩暈がするという人がほとんどであったという。この典型的な農婦症の症状は1966年頃から社会問題となり、新聞を賑わすようになった。

1960年代後半になると、嫁姑の関係は次第にやわらいでくる。

## V. おわりに

今まで述べたように、1950年代の結婚形式は現在のものとは大きく違うことがわかる。結婚式で行われる行事の意味も現在のものとは大きく違っていた。また、農業集落の神子清水と山村集落の阿手でも結婚形式は違っていた。やはり阿手は山深いために結婚式が遅くまで質素であったようだ。確かに近くに鉱山のあった時代には集落のほとんどの人々が鉱山で働いており、それらの人々はお金もあり、生活自体はそんなに苦しいものではなかったようだが、山深い地理のせいもあり、結婚式を大きく挙げるといことはなかったという。現在の阿手には20代や30代の若い人が1人もおらず、移住してくる人も少ない。今まで述べてきた伝統的結婚形態が語り継がれることもなくなりそうである。神子清水など別宮地区でも若い人は村外へと出て行ってしまいう傾向にあり、伝統を伝えていくことが難しくなっている。もちろん、現在でも行われている伝統はある。嫁ぎ先で「合わせ水」の儀式を行ったり、ホテルなどでの結婚式、披露宴後にもう一度嫁ぎ先で披露宴を行うこともあるのだ。だが、集落の人口自体が減少し、若い人達がこのような伝統を目にする機会が減り、自分たちとはまったく関係のないものとして捉えるようになってきている。

1950年代は若い女性は外出することも許されず、戦後という時代のせいもあって親の言うままに親が決めた相手と顔もろくに知らぬままに結婚するという人が多かった。「結婚」の意味が現在とは違い、人々の生活を支えるものとして行われていた時代であった。根底にはつねに「家を守る」という観念があったのだ。特に農業集落である神子清水などでは、結婚して2人で一人前となることで農作業は進んだといえる。生活していく為に結婚は大きな意味をもっていたのだ。それに反して、山村集落の阿手では鉱山もあり、賃金労働の機会が多く、農業中心の生活ではなかったために親が無理に結婚を決めるということも少なかったのではないだろうか。結婚してイエとしての農作業の効率を上げることが求められた農業集落と、個人の収入で生活することが可能であった山村集落という違いが同じ鳥越村内でもあったことがわかる。

戦後は貧しく、人々の生活は苦しいものであった。しかし、それと同時に新たな時代へ向かい、人々が歩み始めた時期でもあった。インタビューの中には「結婚後も仕事、子育て、家事に追われ、気がつくともう年をとってしまった。しかし今は自由に旅行をしたり、買い物へ行ったり第二の青春を楽しんでいるよ」と答えてくれた方もいた。我々は現代しか知らず、この生活が当然と思いついてしまっているが、今回の調査を通していかに今の生活が贅

沢なものか、自由に恋愛できることがいかに幸せであるかを感じることができた。鳥越村では1950年代の結婚形式はだんだんと忘れられている。今回の調査でも「めでた」の歌詞を覚えている人は極めて少なかった。「伝統」のなかにここで絶やしてしまっはいけないものもあると思う。若い人が少なくなり、語り継いでいくことは大変なことであると思うが、今回の私の報告書が少しでも伝統的な結婚式のありかたを伝承してゆくきっかけになればと考えている。

## 注

- 1) 仲人を「ちょうちん持ち」と呼んだ理由は、当時、嫁は夜に婿の家へ嫁いできていた。その際に仲人がちょうちんを持って先頭を歩いたためにこう呼ばれたそうだ。
- 2) 神子清水に決まった名称はないそうだが、便宜上他の集落でも比較的広く用いられている。「嫁いびり」という語を用いることにした。
- 3) 阿手では「嫁なぶり」と呼ばれていた。
- 4) 砂糖をタイ、タケノコ、ナス、サザエ、ザクロ、モモなどの形の木型に流し込んで作る色とりどりの菓子
- 5) 渡津では「婿呼び」とよばれていた。
- 6) 日、月、山、海、里を表した生菓子。日は餡入りの白い丸餅に紅色の米の粉を日の出のように半円にまぶして太陽を表す。月は白い饅頭にゴマをまぶして雁行を表す。山は餡餅の皮一面に黄色い米粒の「いがら」をまぶし、山の幸のいが栗を表す。海は菱形につくられた餡餅で、波に重なりを表す。里は米粒と餡を搗き混ぜて蒸し羊羹をつくり、村里の水田を表す。縁起にちなみ、丸形に形が整えられている。

## 参考

「めでた」(神子清水、相滝、杉森)の一部

めでた めでた  
 こんのやかたは めでたいやかた  
 鶴がご門に巣をかける

「めでた」(阿手)の一部

めでた めでた  
 若松さま  
 枝も栄えて葉も茂る

このや おやまは  
 よもぎの島よ  
 鶴と亀とが舞い遊ぶ

\* 鶴=嫁

\* 巣をかける=巣づくりが出産を意味、家が栄えるように、嫁がうまくやっっていけるように、という意味。